



TITLE:

人文 第31号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第31号. 人文 1985, 31: 1-41

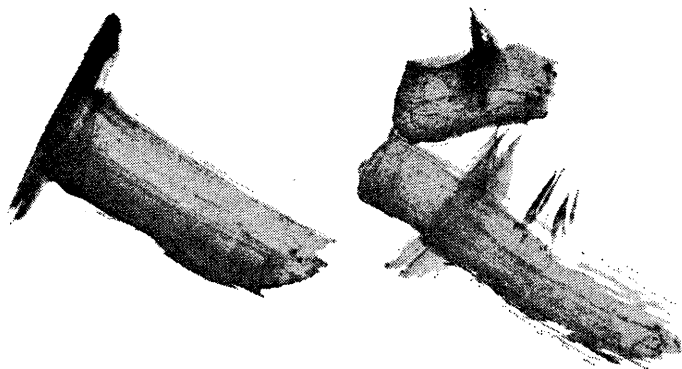
ISSUE DATE:

1985-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57157>

RIGHT:



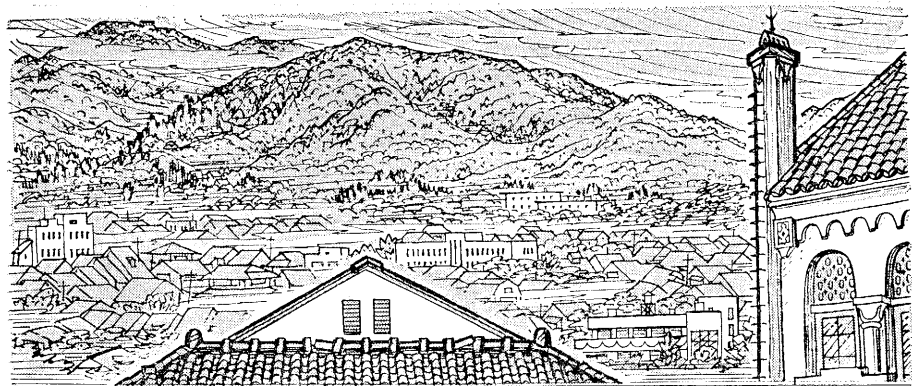
第三一號



1985

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第三号

1984年6月—1984年11月

も く じ

随 想

外国人向けの京都の歴史……………

ゴードン・ダニエルズ

2

講 演

夏期講座

家康・秀忠・家光(藤井)/世界一周(吉田)/李陵(富谷)

／二つの時間(小南)/言葉に見る類別の論理(細川)/《群衆》をめぐる(富永)

開所記念講演

絵画と真景(宮崎)/一八世紀職人の生活空間(阪上)/もう一つの維新・多田隊始末(飛鳥井)

本のうわさ

角山栄『時計の社会史』(甚野)/小南一郎『中国の神話と物語り』(富永)/吉川忠夫『六朝精神史研究』(山下)/上山春平編『国家と価値』(富谷)/林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』(小南)/山下正男『論理学史』(細川)

16

共同研究の話題

「日本領事報告の研究」を振り返って……………

角山 栄

24

琮という玉器……………

林 巳奈夫

一冊の工具書……………

西脇 常記

貝塚先生文化勲章受章記念講演会

殷周史と天命の観念(小南)/佳字考(伊藤)/中国古代史五十年(貝塚)

28

旅

ある日のB・N……………

天野 史郎

ビルマのたわごと……………

平田 由美

異人の街ニューヨーク……………

浅田 彰

32

書いたもの一覧

おくりもの(21)・人のうごき(21)・外国人研修員・招聘外国人学者・外国人研究員(22)・東洋学文献センター講習会(23)・座談会(27)・お客さま(31)

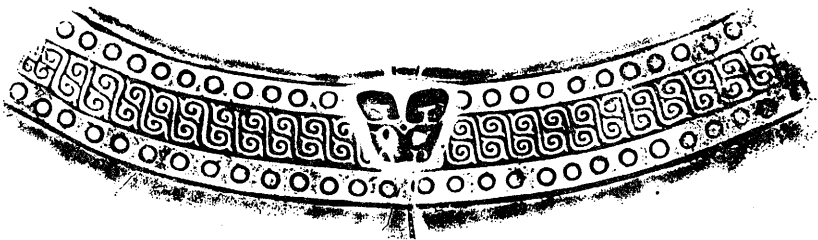
36

外国人向けの京都の歴史

ゴードン・ダニエルズ

私は今回の来日にあたり、イギリスの本屋で幾度も京都の詳しい案内書を捜しましたが、いいものには出会いませんでした。そこで、京都に着いてまもなく駅前の京都市観光協会をのぞきますと、同協会の手になる「ガイドブック京都」と英文「KYOTO」が見あたりました。「KYOTO」のほうは「ガイドブック京都」の英語版にちがいないから翻訳の練習にもなろうと考えて、二つの本をセットで求めたのです。ところが宿舎の国際交流会館に戻って見比べますと、残念なことに、両者はかなり違っているのです。しかし、この違いは当然の事かもしれません。要するに、普通の外国人観光客が京の漬物屋一覧に関心を持つことは稀でしょう。

けれども、二冊をよく見ますと、さらに面白い違いが出てくるのです。それは歴史観の違いといってもよいと思われます。たとえば日本人向けのほうには島原遊郭の歴史と島原大門の写真が入っていますが、英文の本には全々出て来ません。理由は、はっきりとは判りませんが、英文のほうの著者は、外国人に島原が京都の歴史にどのような役割を果たしかたを説くよりも、たぶん彼なりに考えた、清潔な京都のイメージを伝えようとしたのでしょう。



これにもまして面白いのは、この二冊の一九世紀の取扱い方の差です。一九世紀の世界史を考えれば日本の明治維新はドイツとイタリーそれぞれの統一と並んで世界的な重要性を持っています。その上、幕末の京都は政治の動乱のまさに中心地でした。そこで和文案内書のほうを見ますと、古い建物さえ残っていないのにもかかわらず、坂本龍馬や中岡慎太郎の遭難の地についてかなり解説が入っており、さらに霊山の志士の墓地まで出てきます。二条城の説明にも、もちろん大政奉還の事は落とされてありません。しかしながら英文のほうには、一九世紀の動乱や暗殺事件は全く出てこないのです。逆に、こちらは江戸時代の美術と平和にだけ触れているのです。この差の背景には、外国人は日本の歴史を理解出来ない、あるいは、外国人は日本の明治維新などには関心を持っていないと言う先入観があるかもしれません。けれどもボストンの案内書がアメリカ独立戦争には一切触れないとかダブリンの観光案内が反英暴動に口をつむぐとか、パリのガイドブックが革命を語らないといったことを想像するのは極めて困難です。「KYOTO」と言う本は京都の歴史をほとんど美術史と芸術史に尽きるかのように取扱っているといえは、言い過ぎになるでしょうか。しかし和文のものと比べて、京都の歴史をシャングリラ的に神話にしようとする意図があまりにも明らかです。京都の歴史が世界史に密接にかわりあっているという簡明な一点に立脚しますならば、『KYOTO』のような案内書は、世界史そのものへの奇妙な案内をおこなっていると言えるのです。



にがうり

宮崎 法子

最近私は、三百年以上前に生きた一人の画家を追いかけているが、思えば去年の夏、期せずしてその画家の足跡をほぼたどる旅をしていた。その画家石壽は、明の王族として桂林に生まれた。明末の混乱内紛により父王が幽死し、官宦に背負われて桂林の王宮を脱出したのは、四歳の頃であった。武昌（武漢市）へ逃げのび、そこで二十歳すぎまで過した。後、宣城・南京等を経て、新興の大都市揚州へ至る晩年に及ぶ、彼の流寓の生涯がそこに始まった。

山水で名高い桂林へは夜中の三時前に着いた（例によって途中駅からでは不便な切符しか買えない）。暗い町はドブネズミが横行し、ホテルは客満の札を掲げ客を寄せつけようとしない、風景とは裏腹に不潔で観光ずれた不愉快な町であった。桂林の奇峰はまちなかにもはえていて、うち一つを取り込んだ明の王城王宮跡が今日も残っており、王宮跡は師範大学になっていた。この地方に発し、洞庭湖へ注ぐ湘江の流れは、同時に幼い孤児が武昌へ逃れた道筋に当る。石壽の号の一つ清湘老人は周知の如くそれに由来する。



武昌では、ごく普通の家庭を尋ねることになった。木造の老屋の壊れそうな階段を上って目ざす家へ着く。開放された室内は、さっぱりと気持ちよい。木の床は何度も水ぶきされて光っていた。大体江南の人は清潔好きらしい。長江下りの船中、五等の船べりでおじいさんが洗った上着を干していた。ツギだらけで元の色もとめない、ボロボロの上着の、破け穴の一つを、手すりの出っぱりに引っかけて止めて、風に吹かせている姿は満足そうであった。

突然の客に、世話好きな奥さんは、うどんをふるまってくれた。テーブルの上のハエよけをはずし並んでいる常備菜をすめる。このあたりの人が夏に好んで食べるというクーグワ（にがうり）が特におすすめた。近頃日本でも見かける火膨れしたようなイボだらけの薄緑色の細長い瓜、それを二ツ割にし種を取って薄く切りしょう油炒めにしてある。一二片つまんでみるが、それ以上はとてもハシが進まない、文字通り極めて苦い。武漢の夏の暑さは中国三大火炉に数えられている。夜、人々は縁台を道端にズラリと出して、外で寝ていた。この苦さは、そんな夏に欠かせない貴重な食欲増進剤なのであろう。

我が石濤も、暑い夏の日、それを口にしていたに違いない。何気なく見逃していた石濤のもう一つの号、苦瓜和尚の苦瓜が、あの武昌のにがうりであることに思い致ったのは、つい最近になってからのことであった。



講演



夏期講座（昭和五十九年度）

〈混沌と秩序〉

五九年八月一〜三日
於 本館大会議室

家康・秀忠・家光―「將軍」の形成―

藤 井 譲 治

講演では、狸親爺と呼ばれた家康、律義者といわれた秀忠、生れながらの將軍と宣言した家光、この三人の將軍が、幕府創業期に果たした歴史的役割を、家康と秀忠の大御所時代と代替りに特徴的に見られる徳川氏の一族の処分に注目しながら考えてみた。

一六〇〇年関ヶ原の合戦に勝利をおさめた家康は、「天下人」として実権をにぎるが、形の上では、大阪城にいた豊臣秀頼を主君とした。この点は、諸大名が

まず秀頼ついで家康に年賀を述べたことに象徴的に示されている。しかし、家康は一六〇三年四月將軍となることで名実ともに天下人となる。二年後の一六〇五年秀忠に將軍職を譲り、みずからは大御所となった。

しかし、大御所となった家康は、隠居したのではなく、依然として諸大名にたいする知行権、外交権、軍事指揮権などを掌握した。この時期の諸大名の年礼はまず家康ついで秀忠の順になされたが、家康が駿府城に移ってからは、東国大名は秀忠に、西国大名は家康に年賀を述べるようになり、これにともなう東国大名の軍事指揮権も秀忠に移り、將軍の実体化が進められた。

一六一六年家康が死去したことで、これまで家康が握っていた諸権限は將軍秀忠のもとに統合された。一六二三年秀忠は將軍職を家光に譲り、江戸城西ノ丸に移った。これ以降一六三二年秀忠が死ぬまでが秀忠の大御所時代である。この間秀忠も家康同様知行権、外交権、軍事指揮権などを握るが、諸大名への幕府意志の伝達にあたってはみずからの名で文書を出すことは少なくなり、それに替って家光付の老中と秀忠付の老中と連署の奉書が用いられるようになった。また、年頭の礼も、まず家光ついで秀忠の順になされ、將軍の制度面・儀礼面での地位の上昇がみられ、將軍権力の強化が計られている。

こうした展開と歩調をあわせるかのように、家康の死去した一六一六年には、秀忠の異母兄弟である松平忠輝を伊勢へ遠流し、秀忠が將軍職を家光に譲った一六二三年には、秀忠の兄である結城秀康の子松平忠直を豊後に配流した。ついで、秀忠の死去した一六三二年には、家光の弟である忠長から領知を没収し、翌年自殺させた。これらの措置は、將軍権力の継承にあたってその對抗勢力を排除するとともに、一族を処分することで、諸大名にたいする將軍権力の厳しさを示すものであった。

このような過程を経て、官職としての將軍と実権をもった「天下人」とが合体し、後世考えられるようないわゆる「將軍」が成立するのである。

世界一周

吉田 光邦

日本人がはじめて組織的、計画的に世界一周をめざしたのは、いうまでもなく岩倉具視を正使とするミッシヨンが、明治の初めアメリカそしてヨーロッパを回覧したことにはじまっている。その回覧の結果は『米欧回覧実記』の大冊として刊行された。編集と執筆の

中心となったのは、久米邦武である。

それは近代化をめざした明治政府の主要なリーダーたちが、意識的に先進国と目されていた世界の各国を現実に体験し、観察した大旅行であった。この旅行は以後リーダーたちの思考を大きく決定する。体験はひとつの事実として、彼らを動かすようになる。

それとともにジュール・ヴェルヌの八十日間世界一周の翻訳や、仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』によって、世界一周は大衆にも身近なテーマとなった。ことに魯文のそれは、著名な東海道中膝栗毛の主人公の子孫が、世界一周の膝栗毛の旅に出る趣向であり、そこに盛られた滑稽などはすべて東海道のケースの延長にあった。魯文の作による限りは、先進国の西洋の旅といえども、東海道の旅に連続するものであり、異質文化との接触による不連続は起らない。

回覧実記をはじめとする知識人やリーダーたちの世界一周は、日本と海外諸国との大きな不連続性を強調する。しかし魯文の架空旅行記は、西洋もまた日本とさほど変るところはない。ことに人情の機微において、といった見解に立っている。それは明らかに世界認識のふたつの立場であった。

こうして明治の世界一周がはじまる。多くの知識人、エリートたちはひたすら西洋に学ぶべく世界に旅立つ

ていった。そして数多くの世界一周の旅行記が残された。しかしその多くは『米欧回覧実記』の流れに沿うものとなっている。西洋はいつも学ぶべき対象としてのみ存在するものとなっていた。ただその間には大量の労働者移民が、庶民の動きとして注目される。

しかし二〇世紀に入り、明治も末年になると、世界一周は知的世界の拡大の意味をつよくもちはじめ、さまざまな世界一周の手引も現われはじめる。それにはトマス・クック社にはじまる旅行の組織化、パターン化が大きな役割をもっていた。そして明治四一年、朝日新聞社の主催した世界旅行会は、パック形式による世界旅行のさきがけとなった。それは同時に世界認識のステレオ化の原因ともなっていたのである。

李陵——その絶望と転身

富谷 至

前漢武帝期、漢と匈奴との戦争において登場する武帝将李陵については、中島敦『李陵』、菱田春草『李蘇別雑』など小説、絵画の題材にとりあげられ、日本人にもなじみ深い。孤軍奮斗したにもかかわらず匈奴の捕虜となり、激怒した武帝は彼の妻子を誅殺、結果李

陵は匈奴に寝返ってしまうというのが、知られている事件のあらましである。しかし、当時の漢代社会の中にこの事件をおき、法制度という観点から再考してみると違った見解がでてくる。

悲劇の端緒は、捕虜になった李陵救出の命をうけた將軍公孫敖が、任務失敗の理由として、李陵が匈奴に寝返り、漢の用兵を教示したという詐りの弁解をしたことに始まる。言うまでもなくそれは李陵に対する誣告であったのだが、もしこれが真実なら、李陵は謀反罪を犯したことになる。当時の刑法において、謀反は大逆無道罪として総括され、その場合の刑罰は妻子ともども死刑に処せられた。従って李陵については、武帝は大逆無道罪の成立を認め、その法的措置として妻子を死刑に処したのであり、一時の激情にかられた輕率ではなかった。確かに公孫敖の誣告をそのまま信じた武帝に非はある。しかし、物証第一主義をとるのでなく、犯人および関係者の証言を中心に行なわれた当時の訟訴手続、武帝期に至るまでの対匈奴外交において、実際に多くの漢人が匈奴に亡命し、そのため漢王朝がしばしば苦汁をなめさせられたという情況からして武帝が公孫敖の言葉を信じたことも、それなりに理解できるのである。天漢四年に行なわれた李陵奪還の失敗に派生して李陵の家族を誅殺した武帝の行為

は、連坐制適用という法的措置であり、それを武帝にさせたのは、匈奴と漢の一世紀にわたる抗争の歴史であつたとせねばならない。

二つの時間

小南一郎

先秦から漢代にかけての文獻に「終古」という語がしばしば見え、^ス常に^ス永遠に^スなどの意味で用いられている。「終古」の語がそうした意味になることについて、南宋の朱熹は「古が終るのであるから、未来永遠を謂うことになるのだ」と説明する。しかし恐らくは、この語の成り立ちは「古が終る」といった意味構造によるものではなかつたであらう。いくつかの漢字が集まつて一つの単語が出来るとき、個々の漢字の意味の加算の上に単語の意味ができるとする考へ方は、漢語の語義分析の際に陥りやすい誤りで、むしろ避けるべきものである。しかしこの際、敢て「終」と「古」とを分けて考えてみると、両字とも、永遠にといった意味をはじめから含んでいたように見えるのである。

終は、現在の我々の語感では、ある時点でなにかが

停止し喪失して、その後は虚無だと受けとられる。しかし先秦の文獻では「終り有る」ことが祈願され、逆に悪人には「終りが無い」と戒められる。終の字はもと「冬」と書かれた。冬の季節がそうであるように、終もまた循環の時間の中の復活点を意味した。その循環の時間に参入することが希求されていたのである。古の字も、我々が感じるような、過去の時間ばかりを表すものではなかつた。唐詩によく見られる「千古」「万古」の語は、未来永劫を意味することが多い。また古い注釈では、古が天と積される例がいくつかある。「古の文王」といった表現も、文王を過去の人と認識したというより、神聖な時間の中にある者（それが祭祀のたびに顕現することが可能である）と考えられていたと理解すべきであらう。すなわち古とは、現実的な時間を越えた、聖なる時間、というのがその原義に近かつたのではないかと推定されるのである。

我々が生きているのは、せわしなく我々を追いつたて直線的な時間の流れの中においてである。そうした直線の時間以外のものをほとんど感じ取ることができなくなっている我々にとって、終りが始めである循環的な時間、過去から未来への方向性を越えた聖なる時間は、矛盾とも見え混沌とも見える。しかし、我々から見れば混沌であるそうした時間が、それ自体として

一貫した論理性を持ち、当時の人々の価値観と密接に結びついて古代中国に存在したであろうことを、「終古」の語は示唆しているのである。

言葉にみる類別の論理

細川 弘明

言葉にはつねに人間が営む分類の姿を映し出す面がある。どんなに具沢山であれ「味噌汁を飲む」と言うが、多少水っぽくても「お粥を飲む」とは言わない。味噌汁と粥とは何か違う種類のものだ、という分類がそこに暗示される。分類のかたちは、言語文化ごとに異なるけれど、分類という営為そのものは、文化の個別性を超えた人間共通の知的行為であり、言葉における論理性を支える柱となっている。人間の言語に読みとれる分類の論理がどのような性質を備えたものであるかを考えるため、今回はひとつの手掛りとして類別詞言語の問題をとりあげた。中米のハカルテック語（マヤ語族）とオーストラリア先住民諸言語のひとつ、デルバル語（クイーンズランド北東部）の事例を紹介し、分析を試みた。ハカルテック語の資料は、私自身の調査で集めたもの。デルバル語の資料は、オースト

ラリア国立大学のロバート・ディクスン教授の調査報告を利用して頂いた。

類別詞言語とは、あらゆる名詞を意味に応じたいくつかの範疇に分類し、その分類範疇を明示する文法的なしくみを持つ言語のことである。ハカルテック語では名詞が十五の意味範疇に類別され、同じ類の名詞は共通の「類別詞」をとる。ドイツ語が名詞の性に応じた三通りの冠詞を使いわけるように、ハカルテック語には十五のジェンダーとそれに応じた十五の冠詞がある、と考えてもよい。例えば、水・川・湖・雨などの語は共通の類別詞（冠詞）をとる。雪や氷は、これとは異なる範疇に属し、石・鏡・指輪・鉛筆などと共通の類別詞をとる、という具合である。いくつかの類別詞言語における範疇の意味づけのあり方を比較することによって（もちろん歴史的な比較ではなく構造的な比較であるが）、人間が「ものを分ける」とはいかなる営為であるかを検討することが出来る。

今回の検討で明らかになったことのひとつは、分類における残余性の問題である。言葉のしくみには、積極的に分類できないものを一括して放りこんでおく「残余範疇」が必ず用意されている。分類以前の状態は、まさに混沌に違いないのだが、ひととおり分類づけを行なった後に生じた「余り」ないし「分類不能な

もの」は、それにもまして落ち着きの悪い存在である。一元的な秩序を求めれば求めるほど、局部的には混沌の度合が深まってしまふということであろうか。

《群衆》をめぐって

富 永 茂 樹

群衆というものをどのようにとらえるか——これは前世紀末以来の社会学にとって、必ずしも明言されはしない、しかしたえず見えかくれて、これを議論する者の視点そのものをさえ決定しかねない、きわめて重要な問題でありつづけてきた。

過去の議論において、群衆の特徴として指摘されるのは、まず、それが役割や所属によって規定される、したがって一定の秩序をもつ日常的な個人の生活とは別のものだということであった。それゆえにまた、群衆は個人と対比して、理性が低減し、そのぶん情動の高揚した存在であるとされる。ただし、こうした点では一致するものの、それをどう評価するかについて、意見はふたつにわかれる。すなわち、一方で群衆は個人よりも劣っているとする、ル・ボンやジムメルなどの個人主義的あるいは貴族主義的な考えかた。これに

たいして、デュルケムやフロイトは、まさしくそうした群衆のうちに見られるものこそ、社会の本質であるとする。二十世紀の社会学を、またわれわれの思考を支配してきたのは、この後者の観点であった。

だが、人間の欲望は他者のそれを模倣したものであり、欲望の模倣の手本は競争の相手でもあるから、欲望の激化は必然的に相互暴力的な状況、集団の危機をひきおこす。この危機を回避するには、誰れかひとりを犠牲にして、これに集合暴力を加えなければならぬ。この暴力が共同体の基礎となる。——以上のようなルネ・ジラールの仮説をあてはめてみるならば、社会の本質であるべき群衆が迫害、暴力という要素をつねにふくんでいることは明らかである。群衆における被暗示性の高まり（したがって指導者にやすやすと服従する）という、ル・ボンがとりあげ、フロイトが非科学的と断じた性質もまた、模倣の観点からあらためて説明しうるであろう。とすれば、デュルケム以来の社会学主義を安易に受けいれて、祝祭や民衆暴動に見られる群衆の活力の《発現》を過大に評価することにも、多少疑念をいだかざるをえない。群衆とは、秩序を生みだすための、したがって暴力的、また無秩序な存在であるからだ。

もっとも、社会の均質化が進行し、内部での競争が

激しくなってくると、迫害に象徴される共同目標が、かえって形式化し、無目的化し消失する場合もありうる。そこではむしろ、われわれは役割や所属、さらには自尊心からすらも解放され、ある種の自由を感知することができるともかもしれない。ジムメルの言う『大都市の精神生活』の根底をなすのはそうした群衆の姿であり、これを文学のなかで終始描こうとしたのが、ポーでありボードレールであった。こちらの意味においても、社会という抽象的な存在ではなくして、群衆、われわれ自身がそれそのものであるにほかならない群衆が、現代の文化を考えるうえで、無視しえないモデルとなるのである。

開所記念講演（昭和五十九年度）

五十九年十月十五日

於 本館大会議室

絵画と真景

宮崎 法子

中国絵画史上、宋代は観察を通じ創作のエネルギー

を最も盛大に自然から吸収した時代と言える。水墨技法の発展に相俟って山水画が世界の他の地域に先がけて独立したジャンルとして完成した。その宋代の山水画に南北二つの流れがあることは周知の通りである。

十世紀半ばの董源の伝称を持つ『寒林重汀図』は、確かに北方の黃土地帯に根ざす苑寛『谿山行旅図』等主山を画面中央に据え構築的な構成を見せる絵画とは、大きく異なる世界を我々に示している。小さな丘と樹叢以外は一面夕照を反射させる水面である。江南の風光に根ざした水と光に満ちた平明な景であり『一片江南』である。が、同時に北の大様式に匹敵するスケールをも備えている。この絵に秘められた高度な技法や作為はさておき、まさしく無作為に見えるが故にこの江南画はその後そのまま後継者を得ることが出来なかった。そこには後人が真似易い構図上の特色、形をもったモチーフの類があまりに欠落しているように見える。文字通り空っぽの空間に織りなされる姿形の無い光と影のドラマが絵の主題なのである。これは実は風景画の本質に鋭く迫る画期的な試みでもある。董源の弟子巨然の作品群には殆んど画面中央に大きく聳える主山が描かれており、董源の示したこの試みをそのまま継承した作品を見出すことは出来ない。

しかし、その後も江南の景を描く試みは多少形を変

えて生き続けた。その一変奏として『瀟湘八景図』の方法をとらえ直してみたい。洞庭湖周辺の茫漠たる水郷地帯である瀟湘地方の見処を、四字句の題を付し八つ選んで絵画化するこの方法は、北宋後半（一一C中頃）成立し急激に流行し始める。瀟湘八景の各題は、烟霞や雪雨の気象の変化に伴なう光の諸相、即ち董源画に見られたのと同質の江南の風光の魅力を抽出したものであり、董源画が一図で一瞬を捉え永遠化したものを分析し組み合わせることにより、容易に絵画化する道を開いた。題は説明的でなく非限定的であり画家のイメージを束縛しないと同時に、作画の契機を与え一図の核を示唆するのに必要十分のモチーフを提示する。題によって鑑者とのコンセンサスが前提され、有効に働けば、画家の冒険を許し創意を促す。八景の方法がいかに歓迎されたかは、北宋末の徽宗が行なった画院登用試験（唐詩の一句を与え作画させる）にも表われており、この時期の趨勢を示している。南宋画に於ける詩情の重視、余白の増大の特色は、この『八景』の方法の中に兆し、方向づけられているのである。董源画に見られたソリッドな形をもたぬ光の諸相そのものを絵画化する試みは、瀟湘八景を通じ形を変えて、南宋の絵画様式に影響を及ぼしている。また一方十三世紀末（南宋末）の牧谿の瀟湘八景図断簡に、宋代江

南画の一つの成果の実例を目にすることが出来る。牧谿の八景図から董源をふり返ってみる時、両者を繋ぐ中間の遺品の欠如にもかかわらず、宋代を通じ生き続けた江南画の指向をはっきりと確認することが出来るのである。それは同時に宋代の共通財産である自然観察の賜物でもあった。

一八世紀職人の生活空間

阪上 孝

一七三八年パリに生まれた窓ガラス職人J・L・メネトラは、当時の職人には珍らしく、活字にして二五〇頁余りの『日記』を遺した。『日記』の記述はメネトラの経験と身辺での出来事に限られており、その視野は狭い。天下・国家をめぐる議論や哲学的思索は皆無に近い。しかし自分の生活圏を超えることのない、この視野の狭さが、かえってこの時代の職人の生活と文化のありようをよく伝えていると思う。講演では、この『日記』をもとにして職人の生活空間を、家庭、労働、余暇に分けて考えた。

一、家庭。全体として家庭生活に関する記述は少ない。二歳で母に死別し、数年間、里子に出されたとい

う事情もあるが、少年時代の家庭についての記述は、酔払いで怒りっぽい父との衝突と近くに住む祖母の優しさに終始している。生活空間としての家庭の意味は稀薄なのである。アンシアン・レジームのもとで、家族は「統治の基礎細胞」としてきわめて重い地位を与えられており、家族における家長は国家における君主と匹敵する位置をしめた。こうして統治の上での家族と生活空間としての家族の間には大きなズレがあり、このズレをいかに埋めるかは近代社会の形成にとって重い課題となった。

二、労働。職人生活の中心をしめるのは職人組合である。それは彼らの連帯と相互扶助の組織であり《兄弟盟約》がその編成原理であった。それに規定されて、フランクリン流の節約と貯蓄でなく、職人間の《おごり合い》と《共餐》が職人の支配的な価値意識であった。請負った仕事の開始と完成時には頻繁に宴会が催されたし、職人組合は宗教色の濃い集団だったから組合の守護聖人の祭が盛大に祝われた。「私はかなりよく稼いだが、すべてを使い尽した」とメネトラは書いている。

三、余暇。職人組合の性格と職人労働のリズムが一樣でないことから、労働と余暇はたえず混りあい交互する。余暇の空間の中心は酒場だが、そこは気晴し、

情報交換、連帯、さらに労働争議などの謀議の場であった。それゆえ支配当局にとって、酒場の監視と規制は重大な関心事であった。

メネトラの生きた時代は農業的定住社会から工業的定住社会への過渡期であり、前者における生活空間を統括していた中間集団は実質的な規制力を失なおうとしていた。そのことは『日記』からもよく読みとれる。中間集団にかわって、私的な生活空間としての家庭と都市空間の管理装置としての警察の確立が、この時代の課題であった。

もう一つの維新・多田隊始末

飛鳥井雅道

維新史においては、いくつかのなばなし草奔諸隊が、すでに知られている。のちの長州の正規軍にまでくみこまれてゆく奇兵隊をもっとも好運な極とすれば、偽官軍として処刑された相楽総三の赤報隊は、無惨さにおいて、すでに長谷川伸ほか、多くの研究書によって分析され、注目された場合だろう。新撰組もある意味では幕府側の草奔隊として出発し、「会津中将様御預」から、ついには旗本にとりたてられ、敗北

していった隊である。新撰組は「浮浪」ではなく、幕府の側からみれば正規の治安機構として行動したのだとは、すでに戦前に子母沢寛が指摘したとおりである。歴史は、維新の場合、草莽たちの諸隊によって、幕軍・薩長軍の衝突による以上に、より底辺から支えられ動かされていた。

しかし、彼らの多くは忘れられた。丹波山国隊には戦前から、また最近では仲村研の研究があり、京の禁裡御料だった山科で編成された隊については、『京都府山科町誌』があったが、実体は今一つ明かではない。しかし、摂津の奥川辺の村々から戊辰戦争に参加していった、多田院家人たちによって結成された多田隊については、一九八四年に宮川透一『明治維新と多田郷土』（川西市刊）が刊行されるまで、まったくといってよいほど無視されたままだった。この見なおしを、川西市、猪名川町域にまたがる史料によって、わたしなりにおこないたい、というのが、当日の予定だった。多田院とは、多田源氏発祥の地に、多田満仲を祭ったことにはじまり、戦国期に衰退したのち、江戸初期、五百名の直領を幕府にあたえられて再興したが、この直領三ヶ村以外に、現在の川西市、猪名川町、大阪府能勢町にまたがる八十数苗の「家人」が、祭礼のときのみ帯刀を許されて、各村々、およそ二十数村の年寄

庄屋をかねながら、名誉回復をはかっていた。したがって、彼らは厳密には「郷土」ではなく、農民身分だった。

そこへ、慶応四年正月五日付の「参預役所」の召集状が、「岩倉殿執事」の併書きをつけて、六日に到着するところから多田隊ははじまる。彼らは費用自弁で、のべ二〇〇名近くが、東山道鎮撫使、仁和寺宮旗本として従軍し、戦死一、重傷二をだしつつ戦い、明治二年、戊辰戦争終結と同時に、本貫地引きとりを命じられ、要するに使いすてられた。彼らの一切は反政府陰謀によって逮捕されさえた。農民隊からみた維新を今後とも追求してゆきたい。



本のうわさ

角山 栄『時計の社会史』

(新書版、二四八頁、中央公論社、一九八四年)



最近、社会史という名のついた書物がよくめにつく。社会史という言葉のもつ目新しさとその茫漠としたつかみどころのなさ、この言葉を流行のフレーズにした原因であろう。しかし、これをあえて定義しようとするれば、これまで歴史学がまともに対象としなかったことがらを扱う研究だといえよう。とくに、日常生活に深くかわりながら、それがあまりに日常的であるがために無視されてきたことがらの意味を問いなおす作業としての共通理解があるように思われる。

時計はまさに、このような社会史の格好の題材である。本書は、時計という日常的なものの成立と発展の歴史を追うことによって、その背後に隠された人々の時間意識の変容をあつげようとする意欲的試みで

ある。内容をいささか断片的に紹介してこう。まず機械時計は、ヨーロッパ中世の修道院で祈りの時間を正確に知る必要からつくられる。それが都市における公共時計へと発展し、それまでの自然のリズムにしたがった農村的生活を破壊していくようになる。機械時計によりつくられる人工の都市的時間は、時間労働の観念を生みだし、近代社会の根幹を形成することになる。しかし、ヨーロッパで人々の時間意識を根本的に変革した機械時計は、中国ではそれが受容されても皇帝の玩具にとどまり、日本では伝統的な不定時法に合わせる改良がなされた。

とくに本書で興味深いのは、日本の時計の伝統についてである。尺時計、枕時計、櫓時計といった和時計の豊富な種類、また

城下町にあった時鐘の伝統など、時計にまつわるさまざまなことがらが紹介されている。さらに日本のこと以外でも、正確な経度をはかるためのクロノメーターが、英仏の海上制覇をめぐる争いの中から生まれてきたことなどの興味深い指摘がある。

著者もあとがきでのべているように、本書は単なる時計という機械の歴史ではなく、時計と時間の比較社会史を目的として書かれたものである。そのばあいの著者の方法は、時計という生活に密着したひとつのものをフィルターとして、ヨーロッパ、中国、日本における時間意識の差を浮彫にすることである。このようにひとつのものの視点から社会をみるという方法は、歴史を研究する者にとって示唆するところが大きい。とくに日本のヨーロッパ研究者によくあることだが、きらびやかな思想や学説にとらわれすぎて、表街道を走っているつもりが袋小路に入り込むことにならないためにも、このようなものの視点は重要であろう。

このように本書は、さまざまな意味で読み手の興味をそそるものであるが、シンデレラのようなときを導入にするような著者の読者へのサービス精神が、本書をいっそう

読みやすいものにしてかれている。

(甚野尚志)

小南 一郎『中国の神話と物語り』

(B6版、本文四五八頁、岩波書店 一九八四年)

なにしろ、西の方ではイエスがその長くはない生涯を送ったところからはじまり、その後四百年あまりまでの中国の社会と文学を論じた、つまり筆者にとってはほとんど無限に遠いとも言える世界についての書物なのである。こうした著作に接すると、まず自分の知識がいかに偏っているかを痛感し、日頃相手にしている世界の狭さにあらためて驚かざるをえない。

だが、それよりもなお驚くべきは、知らぬことばかりが多すぎるこの本を、闇のなかで手さぐりするように何とか読み進めてゆくと、たとえば「後漢末の社会的アノミー」といった表現に出会い、「これ以後さまざまな歳時記、あるいは季節の行事に関連する物語りや歌謡が残されるようになった」とする記述を読むことである。四つの論文からなる本書を一貫しているのは、伝

統的な共同体社会が崩壊するなかで文学がいかにして自立していったかという主題であり、これは十八世後半以降のヨーロッパ社会における小説の展開過程に興味をもつ者としては、この本で説明されてゆくことがらにたいして、時代や地域の距りを無視してまでも、ある種の近さの感覚をいだき、ここでも同じようなことが起きていたのかと感心してしまう。

ただ、この崩壊した共同体社会とはどのような構造のものであり、それがどのようなに解体し、さらにその後どのような質の社会が成立したのか——こうした点については、この本の性質上詳しくは語られていないが、あるいは知るすべは他にいくらでもあるのかも知れないのだけれども、今少し説明していただければ、書物全体の主旨がもっとはつきりと浮かびあがってきたので

はないだろうか。

それでも、たとえば『西京雜記』から次のような引用がなされ、それが「思い出の時間」といった表現でもって語られているところでは、われわれヨーロッパの近代しか知らぬ者も、文学意識がある種の普遍性をもつことに思いいたらぬわけにはいかない。「楽遊苑、自生玫瑰樹、樹下多苜蓿。苜蓿一名懷風、時人或謂之光風。風在其間、常蕭蕭然、日照其花、有光采。」こうした光と風にまつわるノスタルジーは、十八世紀のヨーロッパの文学と絵画の底流のひとつでもあるからである。

四つの論文のなかでは、『神仙伝』を論じた第三章が、筆者には興味深かった。興味、というのはあまりにも遠いはずの世界にたいして、見当はずれかもしれない親近感をいだいたうえで、さらにいくらかのことを知りたく思った、という意である。けれどもそれはここに記すには細かな点にすぎない。いつかあらためて著者に直接訊ねてみるつもりにして、しかしともかくそうした興味をもてただけでも、この本は門外漢にとっても読む価値があったと言っておきたい。

(富永茂樹)

吉川 忠夫『六朝精神史研究』

(菊判、五七七頁、同朋舎、一九八四年)

思想史の研究の場合、全盛期の時代、巨匠の時代を対象とするのは比較的気が楽である。相手にとって不足はないからである。これに反し、萌芽の時代、過渡期の時代、マイナーな思想家の輩出した時代をとり扱うのは難しい。成功させるのは大変である。

中国思想史上、六朝という時代はまさに後者の性格をもつ時代であるが、吉川さんはそうした難しい時代をみごとに描ききって、りっぱな成功を収めておられる。力量がなければできないことではない。

そうした成功の秘密はいろいろあるが、その第一としてあげられるべきは、中国に関する吉川さんの興味の幅の広さである。経学はもちろんのこと、仏学そして老荘学をもよくこなし、しかもそれを単に哲学史家の立場でなく、歴史家の立場から把握しておられる。

悪しき分業の結果、日本では哲学史家は

歴史的背景に無頓着であり、歴史家は思想には本腰を入れないのが普通であるが、吉川さんの場合、そうした弊害はみごとに克服されている。

成功の第二の原因は、吉川さんが六朝以前の思想、六朝以後の思想にもよく通じておられることであろう。そうでなければ六朝のような中間の時代を扱いきれものではない。これは、ヨーロッパの中世を扱う場合、それ以前のギリシア思想、それ以後の近代思想というものをしっかりとつかないければ、ろくなことにならないの事情は相似적である。

評者は西洋思想史を専攻するものであるが、中国思想にも強い関心をもっている。しかし西洋思想に馴れた評者にとってやはり中国思想の異質性には辟易させられる。これは吉川さんの叙述の仕方のせいではなく、中国思想そのものの性格からくるもの

であることはもちろんである。評者かもつと日本思想に親しんでいたら、中国思想を普遍的思想として評価できたであろうが、幸か不幸か評者は西洋思想に親しみすぎてきただけでなく、西洋思想をこそ普遍思想だという信念めいたものをもつ人間である。もちろん評者といえども西洋思想のピンからキリまでが普遍的で、ありがたいなどと思っではない。非正統的、非普遍的な思想の流れもあるし、正統的、普遍的思想といえども、現代の立場からみれば、時代的制約からして未熟なものが存することはわきまえている。しかしそういった鑑別が可能なのは、現代という時代に立っている評者が自己に特有のバースペクティブを所有しているからである。

吉川さんの六朝精神史は、さきにも述べたように中国精神史の長い流れの中にしっかりと位置づけられたうえで書かれたものであるが、そこで採られた歴史的展望それ自体を、評者のいう現代からの普遍的バースペクティブ——これはけっして評者とおなじものである必要はない——というメタ歴史観からさらに考察されんことを望んでやまない。

(山下正男)

上山 春平編『国家と価値』

(B4版、四五八頁、京大人文研、一九八四年)

東洋史の先輩などからよく、「他の専攻に比べて東洋史専攻者に優秀な人材がでてこない」といった話を耳にする。至極当然であると思う。だいたい頭の切れる者は、最初から東洋史ひいては歴史学などに興味はなく、より pure な分野、文学・哲学にすすみ、どっちつかず、もやもやしたものを払拭し切れない者がしかたなく歴史を選ぶのである。本書『国家と価値』を一読して、私のこの考えが間違っていないことを確認した。

哲学者、社会科学者の論文からなる本書さすがに切れが鋭い。ローマ法思想と反ローマ法思想、正統と異端、律令国家と非律令国家、等々、AとAを対立させ分析していく手法には感心させられる。もやもやした頭の者は、強い否定をなかなか下せない。否、断固とした否定ができないからこそ曖昧の海に溺れてしまうのであろう。ことが

らは、歴史学の中で比較的否定を下しやすい制度史でも同じである。中国の制度において、ひとつの制度を否定することで新しい制度がでてくるとは言えないのではないか、などと愚かな考えを抱いてみたりする。中国史に限らず、日本史研究者にも、これは共通したものかも知れない。「(御成敗)式目も格式や新制と同様、律令という根本から『量時立規』という法のあるべき変化の結果として生まれた」(笠松宏至『法と言葉の中世史』傍点笠松氏)などと書いてあっても、左程抵抗なく受け入れられるの

である。「法と国家」と題する上山氏の論文は、退官講演でも同じ主旨を話され、記憶に新しい。ある制度が廃止されずに存続しつづけた限り、その空洞化・変質が進行しても、その制度は認めねばならないとの主張、制度史を扱う上での基本的態度であり、氏の論はその意味で制度史の正統的論文と言える。にもかかわらず、氏が批判されている日本史家の言い分も否定しきれない。自分自身、批判の対象となっている史家の手法と変らないやり方を通してきたからであらうか。

「筆者は法思想家でもないし経済思想家でもない。どちらかといえば哲学史家に属する……そしてそれが本論文の弱さであると同時に強さでもあるといえる」といった自信の言葉を、私は何時になれば書けるのであろう。(富谷 至)

林 巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』

(B4版、本文三三四頁、図版四四一頁、吉川弘文館、一九八四年)

林氏がこれまで精力的に続けてこられた

一連の研究は、研究所に在職するという条

あろう。しかし、結論から言えば、私は本書を読んで必ずしも満たされた思いを得なかった。

不満の最大の理由は、論理学における「現代」が本書の射程外とされている点にある。チョムスキー理論の位置づけも、もっぱら中世論理学との同質性という側面で捉えられ、「自然言語を扱うチョムスキー文法では、生成規則とともに変形規則をも必要とした」という点にわずかな独自性を認めるにすぎない。だが、ここ十年間ほどのチョムスキー文法の著しい変貌（変形規則が極小化された）を考えるならば、もう少し異なる評価があっても良いのではないか。言語学と論理学は相変わらず蜜月状態にあるが、細かくみれば、文法理論の恋人の座が命題論理学から述語論理学に明け渡されるといふ大きな変化がここ数十年のあいだに起きている。自然言語の意味論をささえるモデルとして両者のあいだには大きな違いがある。このあたりの事情について、本書はほとんど触れない。近代論理学に関して、著者は、それが数学といかに密接な関係にあるかを繰り返し強調する。著者が思いをいたすのは、純粹構造学として

の数学および論理学である。自然言語のようなく不純な構造ともいふべき代物と取り組む者は一体何とすればよいのか、読めば読むほど途方にくれてしまう。

本書は「限量論理学」に対して格段に高い評価を与えている。「限量論理学は結局、命題関数の論理学でもあり、述語論理学でもあり、さらに関係論理学でもある」（一〇一ページ）というわけで、結局、こちらに「西洋合理主義」の一本の糸を認めるのが著者の立場なのだろう。

本書は二部構成で、古代から近代への通史を異なる視点から二度たどる形をとる。話題によつては、前半と後半とを行ったり来たりしないと内容がよく分からないこともある。だがそれは、私のような、論理学の思想的背景にはおおいに関心があるのだが、如何せん古典論理学の技術的な常識が今ひとつ身についてない、という未熟な読み手の側の問題であらう。

（細川弘明）

おくりもの

。貝塚茂樹名誉教授は、このたび京都市名誉市民の称号を授けられた（五九年一月一日）

。貝塚茂樹名誉教授は、昭和五十九年度文化勲章を授けられた（五九年十一月三日）

。小南一郎助教授は、『顔之推「冤魂志」をめぐる一六朝志怪小説の性格』

（東方学六五輯）とそれに関連する研究によつて、第三回東方学会賞を与えられた（五九年十一月四日）

人のうき

。井上進氏を助手（東方部）に採用。（七月一日付）

。礪波護助教授（東方部）は教授に昇任。（十一月一日付）

。吉田光邦教授（日本部）は、六月二五日成田発、北京市で開催された第二回日中民間人会議に出席、北京図書館で資料収集し、同月三〇日帰国。

。浅田彰助手（西洋部）は、七月一〇日

成田発、イタリアのボローニャ大学、フランスのオルセー美術館等で研究文献資料調査を終え、同月二二日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、七月一日伊丹発、イタリアのアブルッツォ地方での文化人類学的調査、トリノ大学、ローマ大学でイタリア中部における社会人類学的調査文献資料収集を終え、九月六日帰国。

。吉田光邦教授（日本部）は、七月一日成田発、ソビエト連邦美術家同盟中央作家协会館で日本デザイン展―伝統と現代―に出席し、モスクワ大学で資料収集を終え、同月二六日帰国。

。平田昌司助手（東方部）は、八月一日伊丹発、中国社会科学学院言語研究所、南京大学中文系で方言研究についての資料収集。安徽省休寧県に於いて言語調査、復旦大学中国言語文学研究所で上海方言の音韻調査を終え、九月六日帰国。

。井狩彌介助教授（西洋部）は、昭和五九年度文部省科学研究費補助金を受け、八月二日伊丹発、コロンボ、シャフナ周辺でヒンドゥ寺院と宗教儀礼の調査、マドラス周辺等でヒンドゥ教聖地調査、デ

ンパサル周辺でバリ島におけるヒンドゥ文化調査を終え、一〇月一三日帰国。

。久保由美助手（日本部）は、八月二九日伊丹発、ケニヤ大学、ラングーン大学で比較文学研究会に出席し、資料収集を終え、九月一六日帰国。

。宮畚法子助手（東方部）は、九月三〇日成田発、遼寧省、吉林省博物館等で北京及び中国東北地方所在中国絵画調査を終え、一〇月一七日帰国。

。小南一郎助教授（東方部）は、一〇月一日伊丹発、安陽殷墟筆会に出席し、華中師範学院、上海博物館等で資料収集を終え、同月二八日帰国。

。柳田聖山教授（東方部）は、一〇月一日伊丹発、広州の光孝寺、龍山国恩寺等で史跡調査をし、復旦大学等で資料収集を終え、一一月二日帰国。

。狭間直樹助教授（東方部）は、一一月一日伊丹発、中山大学で孫中山学術討論会に出席し、同月二七日帰国。

。村田裕子助手（東方部）は、七月一日成田発、北京大学で東北作家研究に関する学術交流中であつたが一身上の都合で一時期帰国（一〇月二七日より一一月二三

日まで）し、一一月二四日再渡航、一九八五年三月三一日帰国予定。

。多田道太郎教授（西洋部）は、一一月二九日伊丹発、ホノルルのイースト・ウエスト・センターで国際映画シンポジウムに参加し、オリエンテーションを終え、一二月一日帰国。

外国人研修員

。Charles W. Holcombe ミシガン大学院生

四世紀中期、会稽郡における知識人たちの活動 指導教官 小南助教授
期間 一九八四年九月～一九八五年五月

。Stephen J. Roddy プリンストン大学院生

儒林外史の研究 指導教官 竹内教授
期間 一九八四年九月～一九八五年三月

。Meril Evelyn バリ第七大学院生

益州名画録の研究 指導教官 荒井教授
期間 一九八四年一〇月～一九八五年三月

。James V. Stokes ケンブリッジ大学院生

馬祖道一と洪州宗派

指導教官 柳田教授

期間 一九八四年一月～一九八五年

一〇月。

。Urs E. App テンブル大学大学院生

雲門文偃禪師の教え

指導教官 柳田教授

期間 一九八四年一月～一九八五年

一〇月

招へい外国人学者

。Alessandro Valota ビサ大学助教授

日伊社会構造の比較研究

受入教官 古屋教授

期間 一九八四年七月～同年九月

外国人研究員

。Alessandro Valota

農村社会の変容を中心とする日伊社会

構造の比較研究

受入教官 古屋教授

期間 一九八四年九月～一九八五年五

月

。全相運 誠信女子大学教授

朝鮮と中国、日本の科学技術の交流の

歴史的研究 受入教官 山田教授

期間 一九八四年六月～一九八四年九

月

。Gordon Daniels シェフィールド大学

上級講師

一九世紀後半期における日英両国の啓

蒙的諸活動の比較研究

受入教官 吉田教授

期間 一九八四年九月～一九八五年三

月

東洋学文献センター講習会

。一九八四年度 第一四回漢籍担当職員講

習会（漢籍電算処理）

第一日（十一月一二日）

漢籍と計算機処理について（講義）

小南 一郎

東洋学文献類目の編集とフォーマット

（講義） 井波陵一、都築澄子

入力用資料作成（実習）

第二日（十一月一三日）

計算機入門（講義）（京大助教授大型

計算機センター）

島崎 真昭

計算機の入出力（講義）（京大助手大

型計算機センター金沢正憲）

入出力実習

第三日（十一月一四日）

入出力実習

データベース（講義）（京大助手大型

計算機センター）

渡辺 豊英

イメージとしての図面と漢籍の蓄積・

処理の方式（京大教授工学部）

坂井 利之

第四日（十一月一五日）

計算機による漢籍処理（講義）

（図書館情報大学教授）星野 聡

コンピューター・ネットワーク（講義）

（京大講師大型計算機センター）

飯田 記子

入出力実習

第五日（十一月一六日）

文献類目と漢籍目録の電算化（講義）

勝村 哲也

大型計算機センター見学

質疑応答

「日本領事報告の研究」 を振り返って

共同研究の三年間は、あっという間に過ぎた。共同研究を始めた頃は、「日本領事報告」の研究といっても、多くのものは始めてきく名前であった。近代日本史の専門家でも「領事報告」といえば、英国領事による日本の通商貿易報告をまず想像するといった程度で、日本にも一連の領事報告があることは殆ど知られていなかった。日本史の学界がそういう状況であったから、国立国会図書館でも外務省外交資料館でも、資料としての領事報告の系統的整理など殆んどできていなかった。そういうわけで私たちは資料整理から始めねばならなかった。

ところで、私のような長い間西洋経済史を研究してきたものが、どうして日本領事報告の研究をとり上げたのか。それは長く外国をみてきたものが振り返って日本をみてみると、日本史家によって見落されてきた重要な問題がいくつか転がっていることに気付いたからである。例えば「時計の社会史」で論じたような、

西洋の機械時計に対する日本の和時計や時の鐘に代表される時間文化がそれである。日本の領事報告も、西洋諸国からみれば当然なければならない資料であるはずだと思ったわけである。それどころか、鎖国のため海外経済情報ゼロで出発した日本こそ、海外市場情報をもつとも必要とした国ではなかったか。今日のように総合商社の支店網が世界を覆い、テレックスが時々刻々に情報を送ってくる時代ではない。三井物産といえどもまだ独自の情報網をもたなかった時代である。その時代に、日本のどんな商品が世界のどこで売れるのか、また売れないのか、といった海外通商情報の蒐集にあたっていたのが実は領事であった。

領事の職務は、西洋諸国では元来駐在地における国民や船舶の保護、それに通商情報を本国政府へ送ることが主なものであるが、海外渡航者や入港船舶が少なかった日本の場合、領事はもっぱら現地における通商情報の蒐集と市場調査に精力を傾けていた。その情報が各商業会議所、商品陳列館から国内商工業を包括した一つの情報システムのなかで効果的に機能したことが、明治日本の貿易拡大、経済発展に貢献したのではなかったか。

ともかく三年間を振り返ってみると、班員にとって領事といい、領事報告といい、何もかも未知の領域で

あった。毎回の報告がそれぞれ新しい資料の発掘紹介であり、試論の展開であった。期限がきたので残念ながら研究会は一応閉じることになったが、新しい資料や事実はいまなお続々と発見されつつある。鉱脈はまだ掘りつくされていないのである。（角山 栄）

琮そうという玉器

新石器時代から近代まで、中国人は玉ぎよくを愛好した。黒、褐色から橙、緑といった各種の地味な色をもった半宝石である。それで作った品物を身につけたり、側に置くことによって、健康、生命に良い影響があると思われられた。生きた人間ばかりでなく、死体の保存にも効果があると考えられた。河北省満城の漢時代の墓から発見された、緑色の玉板を金の針金で綴り合せたシャツのようなものに包んで埋葬された例についてはご記憶の方もあろう。この死体はその上、身体の上にも下にも、何枚もの璧という玉製品（中央に孔のある円盤状のもの）が置かれていた。璧に強い効力が期待されたことは疑いない。漢時代、璧の円形は天を象るものと言われた。また同じ時代に天に対して地を象ると考えられていたのは琮である。琮は漢頃には多角形

の板の中央に大きな円い孔のある玉器と考えられていた。戦国時代頃に方形の厚板に円孔を穿った玉器があって、これが漢人の知識での琮と知られる。璧は漢時代にも、その前の戦国時代にも遺物が多いのに対し、琮は戦国頃には少数例が知られるに留る。

この戦国から漢に琮として知られていた玉器を下下に引伸し、高さ数センチから二、三十センチにした形——たとえば言えば方柱状の紙容器の中央に太い筒形の紙芯を貫いたような形——の玉器があり、従来漠然と周代のものとされて来た。ところが最近これが良渚文化、即ち紀元前第三千年紀末頃の揚子江下流の文化に属することが知られるに至った。また同時に殷から西周、即ち紀元前第二千年紀中頃から数百年程の間に作られたことの証される琮というものは、実は寥々たるものであることも明かになったのである。この良渚文化の墓には、死体の上下、周囲に璧、琮、玉製の斧等が副葬され、合計数十個に上る例も出ている。漢時代に天を象るといわれた璧、地を象るといわれた琮が、揃って盛大に作られたのは、漢を遡ること二千年以上も前の、良渚文化でのことだったのである。璧が天を象るといふ漢代の所伝も、良渚文化の璧の外周小口の四方に、同方向に向う鳥と魚骨のようなものが刻まれている例があって、それが良渚文化に根ざす可能性の

あることは、四年程前に書いたことがある。一方琮の方についてはどう説明がつくものか、今だに明かにできないままである。ただ次のことはわかって来た。即ち、良渚文化の琮には四隅の突出が円味を持ち、筒形の玉製腕輪と言われる器と区別のはっきりしないものがある。腕輪とされるものの中には孔が小さく、大人が着用するのは無理なものも含まれている。一方この筒形の玉器の類の中に、山東省の龍山文化（良渚文化とほぼ平行の時期）の黒色薄手の台付杯との比較から、円底の杯をのせる器台と推定できるものがあり、それとの類比で良渚文化のこの円筒形の器も腕輪ではなく、酒杯の台に使われたと解した方がよいのではないか、即ち、琮は起源的には杯——恐らく天や地の神、或いは祖先を祀る杯の台であったのではないか、ということまでは考え及んだのである。先日の研究会で玉器の話をした時、これを話題に出すつもりでいながら言い忘れた、というのが私の「共同研究の話題」。(林 巳奈夫)

一冊の工具書

——六朝・隋唐時代の道仏論争班——

かつて西安の南、終南山の麓にある楼観台を訪ねた

ことがある。説経台から尾根伝いに古塔へ行くと、途中に化女泉があり、それを管理する道士が黒装束の道士服で現われた。カメラを構えると、拒絶して小屋に入ってしまった。一方、興教寺など今も活動を続けている寺院の僧侶は、まことにそつなく我々の前に出てくる。この道士と僧侶の態度の違いに、日頃書物を通して痛感する道教と仏教の基本的立場の相異を感じ、歴史を越えるもののあることを思った。

さて、研究会が継続して会説を進めている「広弘明集」の編者は僧侶である。六朝隋唐の道仏の論争を伝えるものは、ほとんど仏教側の史料であり、稀に残された道教側の史料も、仏教徒の手によって再編成されたものが多い。いづれにしても、どこまで編者の意が加えられているのか、他の史料で確かめる手立てが少ないため、容易に知ることができない。少しでも具体的な歴史の中で展開された道仏の論争をとらえようとして巻六の「列代王臣滯惑解（歴代の王や臣下たちの頑固な疑惑に対する解明）」を一年程前から選んでいるわけであるが、なかなか編者の手の内は分らない。そこでこの研究会では、言葉、用語から思想に迫るという方法を余儀なくされているが、これが又、なかなか容易な道ではない。道仏と一口に言っても、それぞれ長い歴史を持ち、経学者が一經の研究で一生を終

えるが如く、安直に理解できるものではない。畢竟、いくつかの工具書が必要となるが、一冊をあげよと言われれば織田得能（一八六〇～一九一一）の「仏教大辞典」であろう。俗称「織田辞典」である。

何よりも典拠を重視する中国学である。この辞書の語彙の豊富さ、典拠の正確さは、研究会の為に預め用意されたかと疑われるばかりであり、さらに、例えば新しい禅籍語録の研究に欠かせぬ無著道忠の「禅林象器箋」からの引用の多出など、自派宗派に偏さぬ編纂態度と、その水準の高さは、いずれも称賛に価するものである。織田氏は、真宗大谷派に生まれた学僧として、不惑の年から十年、とりつかれたようにこの辞書に打ち込み、ついに完成を見ずして病にたおれたと言う。辞書は、五年後、高楠順次郎、南条文雄ら仏教学の大家の力を得て世に出た。このような先人の遺産に助けられ、そしていつの日か又、新たな遺産を創り出すのが、この研究会の遠い目標かも知れない。

（西脇常記）

座談会

六月一八日 於 本館二階大会議室

パリ第一大学教授M・アギュロン氏を囲む研究集会
一〇月一七日 於 分館

北京大学教授王瑤氏を囲む座談会

十一月一九日 於 分館会議室

第六次中日友好学者訪日団を囲む研究懇談会

広東省社会科学院副院長

張 磊

中国社会科学院近代史研究所中国近代政治史研究室

主任

張 康

中国社会科学院近代史研究所中国近代政治史研究室

副研究員

王 学庄

感銘を受けた本

樋口謹一

丸谷才一『忠臣蔵とは何か』（講談社）



貝塚先生文化勲章受章記念講演会

名誉教授貝塚茂樹先生は十一月三日文化勲章を受章され、それを記念するため、十二月一日、本館会議室にて、本研究所助教授小南一郎氏、神戸大学文学部教授伊藤道治氏、そして貝塚茂樹名誉教授の順で左記のような要旨で講演会が催された。出席者多数できわめて盛会であった。

殷周史と天命の観念

小南 一郎

西周の王が「天命」を受け「天子」として統治を行なったことはよく知られている。天子が天の「命」を独断的に受け、その「命」を更に臣下たちに分け与える（命を臣下に分け与える儀式は、西周中後期の冊命金文に反映している）という形式の、「命」を介しての上下関係で西周の支配体制の根幹はでき上っていたのである。この天命を最初に受けたのが文王と武王だとされたことは、「文武受命」といった「詩経」の詩句からも知られ

るのであるが、金文資料によってその受命の内容をより詳しく知ることができる。すなわち文王は、金文銘では「上下を匍有する」者とされており、天地を結ぶ者として、強く宗教者の性格を帯びるのに対し、武王は「四方を匍有する」者、すなわち天下の土地の所有者で、具体的には殷王朝を武力で倒して天下を所有した者と、文武両王が対照的に性格づけられている。西周の王権は、文王的な宗教性と武王的な軍事性（土地所有）との二つの性格の結合の上に成り立っていたと考えられよう。西周後期になると、閔中の貴族の勢力伸長にともない、王権の両面性の一方が揺らぐこととなる。「永孟」銘に見えるように、天子から「命」を受けつつも、実際の土地分配は貴族たちの間でなされ、周王の権限は土地所有の面から離れ、宗教的な面に限られてくるのである。こうした情況に対する周王側からの反撃とその失敗とが、共和や宣王中興の伝説に反映しており、これに起因する社会的な不安定が西周王朝の滅亡へとつながってゆく。

こうした重要な働きをする天命の観念は、従来、西周王朝の成立にともない形成されたものと考えられ、特に王国維「殷周制度論」は、その功を専ら周公旦に帰せうとしている。しかし私は、商の安陽期後半から西周中期ごろまでを一つの過渡期とし、天命の観念も、殷王の継承が兄弟相続から父子相続に移行するころより徐々に

準備されて来たと考えたい。それは、卜辞の命（令）の語が天帝や王が発する特殊な命令であることや、先王の称谓に文・武の語がすでに見えること、先王を帝某と呼ぶ（すなわち今王は帝子、帝孫となる）ことなど、天命の觀念に付随する重要な要素の多くがすでに殷末にはそなわっていたことから推定されるのである。

佳 字 考

伊 藤 道 治

甲骨文・金文に使用される「佳」字は、中国の古典に頻出する助詞「惟」、「唯」の原形であり、これらと同じく、多くの場合「コレ」と訓読されて、その意味を考えることは殆どされていない。然し、甲骨文に於ける佳字の用例を検討すると、可成り限定された場合にしか使用されていないことが明らかにされる。

例えば、第一期の甲骨文では、「タタリ」、「ワザワイ」、「不吉」などの語と結合して用いられる場合と、「征伐」など殷王の意志が外に向って伸びることを否定する文中に用いられる場合とがある。第二の場合、殷王の意志の伸張を肯定する文では、「必ず」「由」という文を用い、非

常に対照的である。このことは、佳字が殷王の意志を抑圧するような働きを負わされていたことを示している。したがって、何れの場合も、佳字は殷王にとって否定的な「凶」と考えられることを示す働きをする語として使用されていたのである。

ところが、この佳字は、第三期、第四期になると、「タタリ」などの否定的な語との結びつきが弱くなり、時には祭祀などをうけた神が人間の願いを承諾することを示す文に使用されるようになる。このことは、佳字が負わされていた、人間にとって否定的な働きが稀薄になり、むしろ肯定的な働きを負うものに変化したことを示すものである。この傾向は、西周時代の金文、例えば天亡簋や趺鐘の銘文で、王による恩寵、或いは神による加護を示す文の冒頭に使用されるようになるほど明確になる。一方第一期甲骨文中で肯定的な働きを負わされていた宙字は、西周時代の金文中でも肯定的に使用されているから、佳字と宙（車とも書く）字とは、同じ働きをもつようになったことがわかる。この事は、『尚書』でも惟字と恵（宙車の繁体）字とが同じように使用されることに示されている。

このほか佳字は第五期甲骨文から西周金文、さらには『尚書』でも時を示す句の冒頭に使用されるようになるが、これはその時が、慶賀すべき時であり、それを強調

する働きが隹字に負わされていたのであって、先の天亡簋の銘文の隹字と共通するものであった。

以上から見て、隹字の働きに大きな変化があったのは、殷の甲骨文の第二期から第四期にかけての間であったと言える。この期間は祭祀や宗教意識でも大きな変化のあった時期で、一連の精神的な変化と言えよう。

中国古代史五十年

貝塚茂樹

中国古代史研究といえば、羅振玉氏の来日と氏のもたらした殷墟出土の甲骨とを抜きにしては語れません。しかし、その甲骨文字資料をいかに広く研究者に公開するかは、当時の印刷技術水準からして大問題でした。幸い、京都には小林印刷という優秀なコロタイプ技術をもった印刷所があり、氏のもたらした甲骨片の拓本が原拓に勝るとも劣らない精緻さで印刷公刊され、それを機に中国古代史研究が大いに進展することとなりました。日本の優秀な印刷技術は中国古代史研究に大きく貢献したわけです。先日、機会があって氏の住んでいた家（いまは専売公社の寮となっています）を訪ねることができま

した。今日は、その斜め向いの川越病院に残されております氏の「登受大福」の額を拝借してきましてので、皆様とともに氏の業績を偲ぶよすがとしたいと思います。

さて、この甲骨資料を残した殷王朝は、例えば『詩』商頌・長發に『玄王桓桓に撥おさめ、小国を受けて是れ達す』「相土烈烈として、海外載おさうる有り」などと歌われていることから知られますように、玄王（契）によって創始された、一代おいた相土の時にその版図を大きく広げています。それでは、なぜ相土の時にこのような版図を拡大できたのでしょうか。私は車戦技術の導入が大きな役割を果たしたものと考えています。馬に戦車を引かせて戦う車戦の技術はメソポタミア辺りで発祥し、それ



が次第に東方に伝えられたことは考古遺物などから推定されていますが、それがいつ頃どのような経路で中国に入ったかが問題です。まず時期ですが、安陽の殷墟からは巨大な車馬坑が出土しており、殷王朝がすでに車戦

の技術を持っていたことは明らかです。ところで、『世本』作篇には「相土、乗馬を作る」と伝えられており、これと前の商頌の伝承とを考え合わせれば、殷王朝第三代の王相土が西方伝来の車戦の技術を大々的に取り入れて、殷王朝の版図を拡大しその勢力を確立したと言えましょう。次に経路ですが、殷の都が置かれた安陽の東北方の藁城県というところに安陽より古い殷の遺跡があります。当時の地理的条件を考えると、殷王朝はここからさらに太行山脈を越えて長城線の辺りで西方の異民族との交渉をもっていたのではないかと想像されます。恐らく、車戦の技術もこの経路を通じてもたらされたものでしょう。

お客さま

一九五九年六月一日
中国国家図書館訪日代表団

団長(副館長) 謝道淵
団員(閲覧部主任) 王建華
〃 (中文採編部主任) 黃俊貴
〃 (採選委員会副主任) 金鳳吉
〃 (電子計算機組副組長) 朱巖

六月十九日

遼寧大學歴史系

孫文良

六月二十七日

大韓民國 国史編纂委員長

朴永錫

七月十三日

中国社会科学院副研究員

方行

〃

経君健

〃

張奔流

〃

総務課長

鄭五根

七月十三日

中国社会科学院語言研究所副研究員

李臨定

〃

(近代漢語研究室) 助理研究員

江藍生

十一月二十二日

社会科学高等研究院、東南アジア文献研究センター

長

G・コンドミナス教授

一二月一七日

オクスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジ

学長

レイモンド・カー博士



ある日のB・N

天野 史郎

パリではビブリオテック・ナシオナル、略してB・N（ベー・エヌ）に通うのが大方の留学生の日課である。ましてブルーストの草稿をみるとなれば世界でこのB・Nにしかないものであるから、小生もいやおうなくB・Nに通うの他はない。

異国の図書館ゆえ通過儀礼を経るのは難儀なことだが、それでもヨーロッパの常として、一旦顔見知りになれば司書のこわいおばさんも、本を運ぶマガジニエのお兄ちゃんもいたって愛想が良くなってくるのは有難い。おまけに目ざす草稿のある写本室は、部屋の大きさも手頃で居心地もいい。日参しては筆写に精を出すことになった。ある時は中世写本を読みきたわが研究所の隣を人岩熊氏と同室になり、パリの街を舞台に弥次喜多道中繰りひろげたりもした。もっともあまり見映えのよいものではなかったはずだが。

もちろん写本室の日本人はこの珍妙な弥次喜多ふたりだけではない。円が強くなったおかげでパリの日本人観光客、B・Nの日本人研究者の数はともになうなぎのぼりである。昼飯時になればなんとなく日本人が寄りそって、B・Nのそばの中華レストランへ、というのが小生も含めて多くの日本人研究者のいつわらざる生態であった。そしてあのワイン。昼飯の折、甘美な誘惑に他愛なく負けて口にすれば、午後の数時間は、ひたすらたれ下がろうとする臉を必死になってつり上げつつ過ぐすはめにおちいる。しかも司書の真前で。貴重な写本、とくに重要な草稿はレゼルヴといわれる十席のテーブルについて閲覧することになっており、これが室の中央、司書の陣取るすぐ前にあり良くも悪しくも特等席となっている。ブルーストの草稿はもちろんここでなければ閲覧は許されず、近現代の作家ではほかにフローベール、ヴァレリーなども同様の扱いとなる。

レゼルヴではしばらくの間日本人は小生のみで、まわりのフランス人に緊張しながらも悦に入っていたのだが、次第にブルーストを、ヴァレリーを、フローベールを研究する日本人の留学生、教師が姿を見せるようになった。もっとも全員が一堂に会するということなく、大体は紅毛碧眼の間に立ち混じってのことである。しかしある日いつものようにレゼルヴの席につき、まわりを

見回してみると、これがすべて見知った顔、濃い薄いの差はあれ、すべてあの黒髪。紅毛碧眼がまったたくおらない。この日のレゼルヴは日本人に占拠されていたのである。総勢七名。残り三つの席は、我々の願いもよそにこの日紅毛碧眼の尻の重みを受けとめることなく空いたままだった。

ビルマのたわごと

平田由美

ビルマでは、軍人や警官など一部の人間を除いて、エライ人もエラくない人もみんなロンジー（正確には女性のはタイメン）という腰巻を身につけている。それはタイやスリランカでズボンをはかないのが貧しい労働者であるのとはわけがちがう。だから外人観光客がホットパンツで歩いてたりすると非常に目立つし、眉をひそめられる。というわけで私ははるばる日本から持参した手縫いの花柄ロンジーで町を歩くことになる。

ここで注意しなければならないのは、その歩行法である。ロンジーはキモノと違って輪状になっているため、内股で歩くと布が内へ内へと巻き込まれ、しまいには身動きがとれなくなる。外股、かつ大股で闊歩するのがそ



ラングーン、スーレイ・パゴダ

のコツである。この際、右手で左前の裾を少々たくし上げて、いわゆる（？）遠山の金さん歩きをすると裾さばきがよろしいが、もちろんビルマ人はそんなことはしない。

一日、私はロンジーを腰に巻きつけパゴダ見物に出かけた。ラングーンの寺院は娯楽の少ないビルマの遊園地である。参道の両脇にはみやげ物屋が軒をつらね、お供えの花飾りや工芸品を売っている。境内には粘土細工でお釈迦さまの一生がジオラマ風にこしらえてあったり、全国パゴダ写生コンクール並びに写真展が催されていたりする。もちろん仏像の前には経を唱え額づく一群の人々がいる。

しかし敬虔な信徒もお賽銭をあげる段になると別人となる。ただの賽銭箱ではない。コンクリート製ペンキ塗りの高さ2mばかりの山が、台の上でくるくる回っている。中腹にはポケット状のくぼみがあって銅貨やアルミ貨が入り、麓にはいっそうたくさんのお金 scatter ばっている。よく見ると、ポケットの下には小さな文字で「くじに当たる」「願いごと叶う」などと書かれている。つまり宝くじ（御多分にもれずビルマでも盛ん）を手にした参詣人は、「くじに当たる」をめがけて賽銭を投げるという仕掛けである。ふふん、小乗仏教は現世利益とは無縁であるなどと、誰が。その後いろいろなパゴダでおも

しろい賽銭箱を見かけたが、このメリーゴーランド風のにまざるものには出会わなかった。

思わず小銭をはたく楽しい半日を過ごした帰りぎわ、預けたサンダルを受け取る時、おじさんがニコッと笑って「まだどうぞ」と言ったような気がしたが、あれはひが耳か。私のビルマ語力では確かなこととは断じがたい。

異人の街ニユーヨーク

浅田 彰

秋のニユーヨーク。crisp という言葉がびったりの、心地よく乾いた冷気のなかで、ずっと前からの住人のように足早に街を歩く。そう言っちゃって、誰にも文句をつけられることはない。ほとんど交易だけで成り立ったこのコスモポリタン・シティでは、ある意味で誰もが異邦人なのだ。そんな彼らと、店先で、あるいは乗物の昇降口で欠かさず挨拶を交しながら、僕はこの街が本当に好きだと思う。

もちろん、こんな気分は京都では決して味わえない。そこでは「おなじみ」という名の生ぬるいウェットな空気が重苦しくまとわりついて、新参者は訳知りの若年寄

りを気取りでもしないかぎり、息をつくことができない。東京は、その点、ずっとオープンだ。そして、東京よりもはるかにオープンなのが、このニューヨークなのだ。ニューヨークに来るたびにホッとした気分になるというのは、それにしてもいささか奇妙な話ではある。

しかし、それとは逆の印象をもつ人もいる。たとえば、ハドソン川を渡ったニュージャージー側の住宅地に日本人同士かたまって住む、商社員や銀行員の家族たち。彼らはたまにしかマンハッタンへ行くことがない。

そこは、異人たちが住み、恐ろしいことが起こる、川向こうの「他界」だ。その証拠に、Aさんがスリにあった、いやBさんはホールド・アップに出くわしたらしい……。うわさは日本人共同体をかけめぐるうちに膨れ上がり、「他界」をいつそう近づき難いものにする。逆に日本人共同体内部のコミュニケーションは異常に密度の高いものとなり、ちょっとした事をめぐって感情的負荷の高い憶測や中傷が乱れ飛ぶのだ。これは僕の見聞したいくつかの事例をもとに描いたいささか極端な構図ではあるけれど、いま「共同幻想論」を書くとするばその舞台はここ以外にないと言っても過言ではないだろう。

せっかくニューヨークにまで来て、今までより粘着力の強い共同幻想にからめ取られるとは、何と皮肉なことか。そこから脱け出すのは簡単だ。一人で橋を渡って、

マンハッタンへ行ってみればいい。ここ数年のジェントリフィケーションの結果、街が熱いエネルギーを失った、といて嘆く向きもあるくらいだから、恐ろしいことなどまず起こらないだろう。むしろ、街は心地よく乾いた冷気で外来者を包みこんでくれるだろう。それに慣れて、自分も昔からの住人のように足早に歩き出すとき、心やさしい異人たちに混じって、自分も一人の異人になるとき、人は本当の意味でニューヨークに來たということができる。そのような体験を求めて、僕は時どきこの巨大都市を訪れるのだ。

書いたもの一覧

一九八四年六月～一月
(五十音順・印は単行本)

・赤松 明彦

ダルマキールタイの論理学『講座・大乘仏教』9 認識論と論理学
春秋社 七月

・浅田 彰

◎共編著『GS-1』
ポリニ 最後のビアニスト
冬樹社 六月
ちくま 七月号

討議・混沌の中から響くもの IN*POCKET 七・八月号
理想 八月号

◎共訳・ダグラス『儀礼としての消費』

新曜社 九月
広告批評 一〇月号

企業文化論ノート
ローとモンテスキュー

樋口謹一編『モンテスキュー研究』白水社 一〇月
◎共編著・『水牛楽団休業』 本堂 一〇月

討議・テストイモニー1
坂本龍一編『本堂未刊行図書目録』朝日出版社 一一月
グレン・グールド——大いなるもぐらの思い出

◎共編著『GS-2』

レコード芸術 一一月号
冬樹社 一一月

・飛鳥井 雅道

明治の出发点と天皇制
ちくま 一五九号 六月

◎国民文化の形成(編)人文科学研究報告

国民の創出(同右所収)

筑摩書房 六月

宮崎夢柳の幻想(同右所収)

同右

猪名川の明治維新・多田隊始末 編集通信いながわ町史 六月

明治三〇年代の切市・市民の新聞 『日本の歴史・中公バックス』

二二巻付録 八月

魚文の読みなおし

そろん日本文化 一〇月

幕末における大政委任論

歴史公論 一〇月

天皇・その権威の構造

現代の理論 一〇月

社説の意味

世界 一一月

近代日本の「高音」部と「低音」部

『民友社思想文学叢書第六卷月報』三一書房 一一月

民権文学の先見性

日本文学 一一月

◎新修大津市史第七巻地域編・北部(共編)

一一月

・井 狩 弥 介

Baudhāyana Śrautasūtra X on Agnicayana-English Translation and Notes, in *AGNI, the Vedic Ritual of the Fire Altar* (ed. by J. F. Staal) Vol. II, 1984 Berkeley.

The Ritual Preparation of Ukhā and Mahāvīra Pots, *Ibid.*, 1984 Berkeley.

南インドのヒンドゥ寺院の構造と儀礼

仏教芸術 一五六号 九月

スリランカの宗教儀礼と音楽についてのノートから(シンポジウム アジアの芸能) 芸能史研究 八六号 一〇月

井上章一

日光東照宮とブルーノ・タウト(祖父江孝男・杉田繁治編『暮らしの美意識』) ドメス出版 六月

三島通庸と国家の造形(飛鳥井雅道編『国民文化の形成』)

筑摩書房 六月

霊柩車の誕生

現代思想 九月号

対談 プロレスを語る——プロレス第二芸術論—— 常見耕平氏と

現代風俗 八号 一〇月

岩熊幸男

談叢近代日本関係洋書(VI)—55 George William Knox,

Japanese Life in Town and Country, 1904

人文学報五七号 九月

宇佐美 育

日の沈む国(上、中、下)

言語生活 六月〜八月

夕陽讃歌(上、中、下)

言語生活 九月〜十一月

小野和子

原始母権社会説の検討——仰韶文化の墓葬と住居址をめぐって

古史春秋一号 六月

鏡花縁の世界——清朝考証学者のユートピア像——

・ビーター・コーニッキー

Disraeli and the Meiji Novel, in Harvard Journal of

Asiatic Studies

思想七二一 七月

貸本文化比較考

四四卷一号 六月

アデンの想い出その他(現代の言葉の欄) 京都新聞 八月九日

・小南 一郎

汪瑗「楚辭集解」(京都大学漢籍善本叢書卷五、卷六、解説)

同朋舎出版 八月

・阪上 孝

書評・柴田三千雄『近代世界と民衆運動』

史林 六七卷三号 五月

モンテスキューとデカダンス 『モンテスキュー研究』一〇月

・佐々木 克

錦旗薩長への道義の抗戦

『歴史と人物』一〇月号

松平容保と会津藩の戊辰戦争(『松平容保のすべて』)

新人物往来社 一〇月

・竹内 実

フランスと中国

京都新聞 七月二日

よみがえる徐福伝説

京都新聞 八月二十二日

民衆の無頼性と英雄性

問題と研究 九月号

中国の曲折の彼方へ

世界 九月号

大学と研究所についてのおもいつき

現代の高等教育 一〇月号

京都新聞 一〇月十一日

三十五歳の中国
魯迅文学の啓示—「故郷」「藤野先生」 国語教育 一〇月号

中華人民共和国

アジア歴史研究入門Ⅱ所収 同朋舎出版 十一月

曲折の中国 大阪古河国際センター講演記録 十一月

・多田 道太郎

からだ百面相(二一三一)

共同通信社(配信) 六月〜十一月

解説・外山滋比古著『メモと日記の方法』 潮出版社 七月

悪の華 朝日新聞 七月

民族移動の考現学 読売新聞 八月

寝とほける 現代 九月

解説・李御寧著『縮み』志向の日本人』 講談社 一〇月

・田 中 淡

歴史絵草紙・22・新大仏寺(監修)

Voice (PHP研究所) 一〇月号

・ゴードン・タニエルズ

The American Occupation of Japan 1945—1952 in A. H.

Ion and R. A. Prete(ed) *Armies of Occupation*, Wilfred

Laurier University Press, Canada 九月

The Re-education of Imperial Japan, in *The political Re-*

education of Germany and Her Allies after World War

II, ed. by N. Pronay and K. Wilson, London, Croom

Helm, 1985.

・谷 泰

「私の『恥ずかしい』話」

季刊人類学一五・二、講談社、六月

◎「聖書」世界の構成論理

「心」を再読して 季刊人類学一五・三、講談社、九月

・角 山 栄

謎の時計

時計と私 新潮45 六月

いまこそ、歴史をみる眼を 文化評論 六月

高齢化社会の時間——「時の記念日」を考える—— 月刊歴史教育 六月

シンデレラの11時45分(『時への旅立ち』Ⅶ) 読売新聞 六月七日

文化財として和時計保存を 服部セイコー 六月

パリ万国博での茶戦争(『明治叢書全集』第五卷「月報」) 読売新聞 六月一〇日

歴史の味(藤田貞一郎・宇田正編『宮本又次史学館』) 農山漁村文化協会 六月

時間——そのハードとソフト—— 思文閣出版 七月

暮しのデジタル化がすすむ 和歌山県医報 三五五号 七月

望星 八月

大阪府庁の鐘

オール関西 九月

茶の文化

葵 84秋 九月

現代米国のコメのルーツ

山陽新聞 九月七日

●産業革命の群像(清水新書)

清水書院 一〇月

時間と文化(対談)

日本経済新聞 一〇月十七日

歴史家から見た「時間」(ライフサイエンス懇話会『十五年と

七日——二二世紀へのライフサイエンス』)

和歌山県医師会 一〇月

茶(日本アイビーエム編『心とからだち東西南北』)

日本アイビーエム 一〇月

英国の日本米

文芸春秋 十一月

・富永茂樹

ルネ・ジラルル『世の初めから隠されていること』書評

週刊読書人 七月九日

◎自尊と懐疑——文芸社会学をめざして(共編) 筑摩書房 七月

小説から社会学へ

ちくま 一六二号 九月

風土、習俗、一般精神——モンテスキューと比較社会論の展開

(樋口謹一編『モンテスキュー研究』)

白水社 一〇月

・中村賢二郎

シュトゥツペリヒ著『ドイツ宗教改革史研究』書評

読書新聞 九月一七日

・狭間直樹

武漢シンポジウム外国人参加論文について——現代中国におけ

る辛亥革命研究時

東亜 五月号

中国近代における階級闘争と民族運動(『社会経済史学の課題と展望』所収) 有斐閣 九月

・樋口謹一

モンテスキュー——生涯と時代(樋口謹一編『モンテスキュー研究』)

白水社 九月

『法』の精神』における虚と実(同)

白水社 九月

「納得」原理の忠臣蔵チームワーク(『春夏秋冬』一九八四年秋季号)

第一勧銀業務開発部 九月

価値としての平和(日本平和学会編集委員会編『平和の思想』)

早稲田大学出版部 十一月

・藤井讓治

◎若狭小浜城——小浜城跡発掘調査報告書——(共編著) 六月

◎北野天満宮史料・目代記録(共編) 六月

・順造館とその時代——新順造館10周年記念誌—— 七月

・京都町触集成・第五卷(共編) 岩波書店 一〇月

・柳田聖山

今月のことば 花園 六月——一月

禅語コーナー 花園 六月——一月

「義雲語録」のこと(『義雲禪師研究』のうち) 大本山永平寺 六月

祖山叡松会刊 孝慈室省念老師を想う 春秋 第二五八号 六月

久須本文雄訳注「菜根譚」のこと(講談社刊「菜根譚」表紙

帯)

- 『一休骸骨』(現代語訳と解説、対談) 禅文化研究所刊 六月
●『純禪の時代、祖堂集ものがたり』 禅文化研究所刊 七月
仙厓の思想(『仙厓の禅画―悟りの美』のうち) 日貿出版 七月
水上勉「良寛」の書評 歴史と人物 七月号 七月
十牛図について 禅文化第一一三号 七月
老来殊に覚ゆ山中の好きことを 清泉第一五号 七月
枇杷の寺(京都新聞夕刊十四日号「現代のことは」) 七月
蘇東坡作といわれる詩の出典 日本医事新報第三一四五号 八月
病僧(京都新聞夕刊一日号「現代のことは」) 九月
湘南潭北封疆を絶す 清泉第一六号 一〇月
一休と芭蕉 晨第四号 一一月
山下正男 理想 一〇月
情報概念の思想的背景
山本有造
談叢近代日本関係洋書Ⅳ(43. A. Carruthers, The Pet of
Consulate, London, 1882) 人文学報五七号九月
横山俊夫
談叢近代日本関係洋書Ⅳ(Henry Harben, Japan and Back
Welwyn Garden City, 1936) 人文学報 五七号 九月
外国で日本語を勉強するということ―ワルシャワ大学日本語

学校の場合――(ピーター・コーニッキー氏と対談)

ことは・こころ 二号 一〇月

外国をみる眼――百年まえの話

竹中育英会誌 三二号 一二月

The *Setsumoku* and Japanese Civilization, in *Japanese Civilization in the Modern World* (ed, T. Umeso, H. Betsu & J. Kreiner), *Serri Ethnological Studies*, no. 16, 一二月

・吉川忠夫

月刊百科 二六四号 一〇月

類書と隸事

・吉田光邦

「花鳥」所収 六月

花鳥画の成立

ちそう 六月

●京都の工芸(共編著)

平凡社 六月

道具と人間

「大工道具集」 六月

錬金術師ベドガー

「陶芸の美」② 七月

木器の歴史

「木の文化」③ 八月

日本のデザイン

「Japan Design」 八月

香炉小史

「香炉」 九月

産業技術史博物館の実現

工業 九月

日中文化交流意外史

「中国大陸」 一〇月

産業技術史博物館の提唱

学鑑 一〇月

花のいろは

「花風姿」 一一月

唐招提寺金堂	オール関西	測る文化史	鉄
Technology and Emotions	Konichiwa	Foreign Images of Japan	Sunionno Quarterly
◎京都大事典（共編著）	淡交社	やまとの文庫	天理時報
技術史の一断面	三省堂ぶっくれっと	通産大臣表彰……伝統産業振興に関して	
	六、八、一〇月		六、一、一月
			一一月

人

文

第三号

一九八五年三月三十日

京都大学人文科学研究所発行

図書印刷(株)同朋舎

非売品